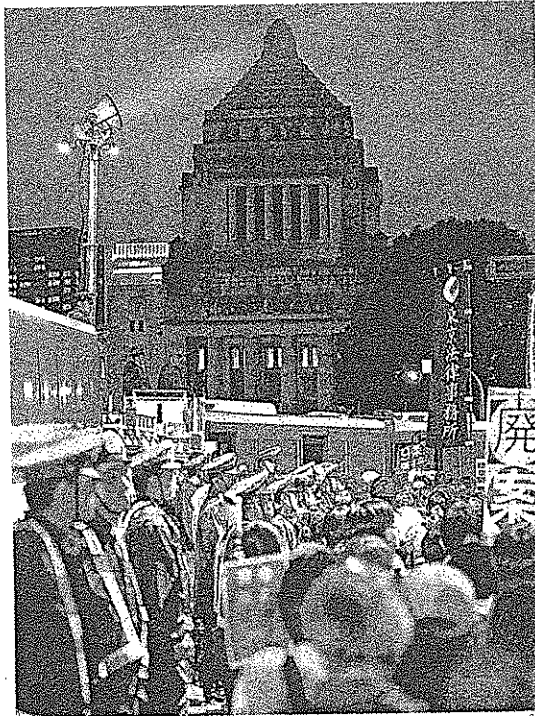


国会周辺に市民集結 成立阻止 諦めない

「9条を壊すな」「力すくか」。安全保障関連法案が参院平和と安全法制特別委員会でも可決された17日、国会周辺には朝から多くの市民が集った。採決進行に憤りつつも、諦めの色はない。「正念場はこれからだ」。議案を求める訴えがやむこぼななかった。



安保関連法案が参院特別委で可決された国会前には、夜になっても法案に反対する大勢の人たちとそれを囲む警察官の姿があった=17日

声上げ続ける 若者「シールズ」

雨の国会前。夜には正門前への道に人があふれ、身動きしづらい状況に。主催者発表で約3万人が参加し、「戦争反対」「強行許すな」のコールが響いた。警察庁は正式発表していないが、警察関係者によると、約1万1千人が参加した。

いどが自衛官というホテル従業員清本博美さん(24)「埼玉県久喜市」は、政権や法案に「反対の1票を投じる気持ちで、仕事を終え1時間かけて駆け付けた。これだけ多

くの人が声を上げても駄目なのか。でもまだ諦めない。勉強や部活動をするのと同じように、路上で声を上げる。肩肘張らず、できる範囲で。それが憲法の求める「国民の不断の努力」。安全保障関連法案の反対運動をけん引する存在となった若者団体「SEALEDs(シールズ)」。

活動に取り組んできた。一橋大2年の正木純さん(20)がこうした運動に関わるきっかけは、在日コリアンを敵対視する「ヘイトスピーチ」が東京・新大久保で行われたことだった。抗議行動に参加し、新大久保での街宣活動を止めることができた。声を上

げることが社会に変化を生み出した。「セロカ1000じゃない。少しずつ変えていけばいいと気付いた」。安保法案に関しては「この日常を守りたいから」と反対する。法案は戦争に参加する道を開き、当たり前だと思ってきた日本の「平和主義」を覆すと感じるからだ。

日本大3年の今村幸子さん(21)は就職や家計、大学の単位と同様に、政治のことも心配していく。法案が成立しても声を上げ続けるつもりだ。

タレントの石田純一さんも姿を見せ、「この国は個別的自衛権で守れる。今年は戦後70年。世界に誇る平和国家を100年、150年と続けていこう」と力を込めた。この日、委員会採決の知らせが飛び込んだのは午後4時

40分すぎ。「ええっ」。一瞬の静まりの後、抗議の叫びが広がった。登壇した野党議員が「断じて許さない。これらが正念場だ」と本会議場の採決阻止を呼び掛けると「そつだ」の声があちこちから上がった。

9/18 福井

正念場これからだ